
精霊の子供の話(スイキ)

かいと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊の子供の話 スィキ

【Nコード】

N9955Q

【作者名】

かいと

【あらすじ】

精霊が住む世界で生きる小さな子供の話。

主人公スィキは、己の所為できょうだいに傷を負わせてしまったことを悔い、ずっと己を責め続けていた。

そうして俯き続けていたスィキに前を向かせたのは、ある日出会った同じ年頃の少年だった。

少々の残酷な表現（大怪我）があります。

サイトに掲載した話を推敲して投稿しています。

求罰望罰

罪も、罰をも、与えてくれないのならば
せめて、どうか

+++

幅が掌を余る厚みの本を漸く読み終え、その本を音を立てて閉じながら、私は伸びをした。

ぎしりと、緩やかな背もたれのある椅子が軋む。

そして、本を持って椅子から立ち、本棚へと本を返した。

両手で持たなくては運べないこの本は、最も上の棚にあった物だ。私の為にと用意された踏み台を登り、背伸びをして、どうにか本を元の場所へ戻す。

早く、父様のように大きくなりたい。

私は、自分の小さな手を見ながら切実にそう思った。
指の間に水かきを張ったこの手は、まだあの人の半分程度しかない。

ここは、水の系統の精霊を束ねる、>王<の一人>氷王<の館。

>氷王くとはつまり、私の父様であるヒョウガキ様の事だ。

私は、その第一子にあたる。

まだ、息子でも娘でもない。

純粋な水の精霊というのは精霊の中でも特異な存在で、ある一定の時期までは両性体だからだ。

魚のひれのような形状をした耳が赤く染まり始めると性分化が始まり、大体一週間程度で耳の色が元に戻り、性別が決まる。

私はまだ半人前の両性体で、未だ耳の赤くなる兆候はない。

でも、もうすぐだ。思いながら、魚のひれに似た自分の長い耳を撫でる。

ずっと息子のように扱われているから、恐らく私は『男』になるのだろう。

「……さて、と」

私は踏み台を降り、自由に読んで良いとされている父様の本棚を物色した。

けれど、手が届く範囲から手当たり次第に読んだので、めばしい物はもう読み尽くしている。

だから、私は父様の机に目を向けた。

机の上に、大きな本があった。

机の物には手を触れてはいけないと、きつく言われている。

しかし、そこには本があった。

そして、開いていた。

近寄り、机の横からそれを覗き込む。

「水の、龍の、呼び方」

声に出して、書面の大きな項目を見る。

これは父様の魔術書だ。

私は目を輝かせた。

慌てて、同じ部屋にある己の机から、書き写す為に紙とペンを持つて戻る。

机の上にある物に触れなければ問題は無いだろう。

水の籠。

大丈夫だ。

私は>氷王<ヒョウガキの第一子。

出来るに決まっている。

「そうだ、ヨウスイにも見せよう」

私は、書き写し終えてからふときょうだいの顔を思い浮かべて呟いた。

一人でやってしまうより、証人が居た方が良い。

だから、私より年下の、穏やかな微笑を浮かべるきょうだいの前でやろうと。

そう決めて、部屋を出た。

大丈夫。

絶対出来る。

それは、奇妙なまでの自信だった。

+++

私たちが住む父様の館は、その半分を巨大な湖の上に、残り半분을岸辺の花畑へと乗り上げた格好をしている。

何処の館も通常は陸上にあるのに、その半分以上を湖の上に行っている

のは、水中でしか生きていくことが出来ない母様のためだ。

特別純粋な母様の子供ではあるけれど、水の精霊でも一番に強い精霊を父に持つているから、私もヨウスイも陸上で活動することに支障はない。

館と湖の周囲は、背の高い木々で囲まれている。

深い森の中央に建っているのだと、以前やって来た父様の友人が言っていた。

確か、風の精霊だったと思う。

私は、花畑のあちらこちらに顔を出している大きな岩の一つに近寄った。

そして、平たいそれに指を噛んで滲ませた血を擦りつけ、紙に書き取ってきた通り、そこに円を描く。

初めてやる行為に、私の胸は高鳴っていた。

後ろから、ヨウスイが不安げに覗き込んでいるのが分かる。

「大丈夫なの？ 兄様……」

まだ性別も決まっていない私を『兄』と呼ぶ、幼いきょうだいを肩越しに見やって、大丈夫だと微笑んだ。

「見ている、ヨウスイ。きっと綺麗だ」

円を描き終えて、指を舐めた。血と土の味がする。

僅かな痛みを放つ傷をささと治して、私は己の血で記した円の前で、片手に持っていた紙に目を落とした。

紙に書き取ってきたまま、たどたどしく、唄のような言葉を唱える。

意味は分からないが、それを唱える度に何かが体から流れ出るような感覚があった。

辺りの空気が水を含み、霧を生む。

兄様、とヨウスイの細い声がして、でも大丈夫だと答えてやる余裕は無く、私は少し視線をやる事で答えた。

力の風が渦を巻くのが、眼の端に映る。

精霊獣を操る事が出来るのは、大人の精霊だけだ。

もしも出来たら、きつと。

父様は誉めてくれる。

「……現れる、水龍！」

唄を最後まで唱え終え、私が叫んだ瞬間に、目の前の霧が集って一つの塊になった。

そして伸び、目を開く。

全ての形が、ゆっくりと水から造られていく。

私とヨウスイの目の前に現れたのは、龍だった。

赤い瞳がこちらを映している。

大きな口が裂けるように開き、龍は低く産声を上げた。

「……やった……！」

体の力が抜けて、へたり込みながら呟く。

呼べた。

出来た。

出来たのだ。

きつと父様は誉めてくれる。

自慢の子だと頭を撫でてくれるに違いない。

飛びあがりそうなほどに嬉しくて、口が綻んだ。

けれど、その喜びは、ほんの一回の瞬きの間しか持たなかった。

水の体を得た龍が、こちらを睨んで襲いかかって来たのだ。

「う、うわ！」

驚いて声を上げながら、無謀にも両方の掌を突き出す。
水かきがいつぱいに広がって、龍の身を止めようと足掻く。
しかし、強い力を持った水の獣は、その体を刃に変えた様に易々と、私の両の手にある水かきを全て切裂いた。

その勢いに押されて、後ろに倒れ込む。私の上を、龍が通過していく。

起き上がり振り向くと、長い体を煩わしそうに蠢かせながら、龍が体の向きを変えていた。
地に付いた手が、熱い。
痛い。

「……何で……！？」

私は、信じられない思いで、己が呼んだ獣を見た。
どうしてだ。

私が呼んだのに。

私は何も命じていないのに。

主は私なのに。

どうして。

「……どうして……！」

今までに無いことだった。

どんなに難解な本だって理解出来たし、父様がやって良いと言ってくれた魔術で、出来ぬ物は一つも無かったのに。
どうして。

龍は、高く長く、咆える。

そして、突進はせずに身を振った。

その体が伸び、尾の先が尖る。

龍は、それで私の首を撥ねる気なのだろう。

それは分かった。

けれど、私の体は動かなかった。

「兄様！」

その声はすぐ傍から上がり、私は仰向けに倒された。

少し斜めなのは、左から右へと押し倒された所為だろう。

花の中に隠れた石があつたのか、頭を硬い物でぶつけて、痛い。くらくらする。

自分の心臓の音が、大きい。

私は眉を寄せ、反射で閉じていた目を開いた。

胸の上を、何か温かな物が広がっていく。濡れているようだ。

それが何なのか確かめる為に、肘を付いて身を起こす。

大きくあるのは、赤い染み。

その中央を、ころりと何かが転がり落ちる。

「ッー！」

それは、ひしゃげた眼球だった。

すぐ側には、ヨウスイが伏している。

私を引き倒したのはヨウスイだ。

その髪が、手が、顔が、血で汚れている。

この血を流したのはヨウスイだ。

ならば、この眼球の主は誰なのか。

そんなこと、分かりきったことだった。

長い長い、音が聞こえた。

それが、自身の叫びだと気付くのに、少し掛かった。

「ああああああああああッ!!」

私は叫んでいた。

叫び続けながら、私は前を見る。

同じ血で繋がったきょうだいの瞳を抉り潰した獣を見る。

水でその形を作り上げた龍の目は紅く、にたりと笑っているようだった。

大きな口が開くと、間を水が数筋繋いで、まるで獲物を前にした肉食獣の唾液のようにも見えた。

手が痛い。

ヨウスイが死んでしまう?

私は死ぬだろうか。

殺されるのだろうか。

目の前の獣に。

己が作り出した物に?

ヨウスイが動かない。

どうして?

頭の中を、ぐるぐると言葉が回る。

まだ、私は叫んでいるのだろうか。

それとも、もう黙っているのだろうか。

それすら分らない。

ただ、恐ろしかった。

「氷の牙よ!」

低い声が、突然響く。

それと同時に、水龍の体へ大きな氷柱が数本突き刺さった。

液体の体が逃れる前に、氷柱は触れた所を冷やし、凝固させていく。

ほんの数秒を置いて、龍はやがて一つの氷像になった。

草を踏む足音が聞こえて、私はゆっくりそちらを見やる。

こちらへと近づいて来るその音の主は、額の中央に海と同じ蒼の魔法石を宿していた。

私達と同じ魚のひれのような形の耳の、背の高い、気難しい顔をした男性だった。

「……父様」

>氷王くだった。

父様は、その、凍てつくような深い青い瞳で私を見て、そしてその目をヨウスイへと移し、足を速めてヨウスイの傍へと急いだ。

屈んだ父様が、ヨウスイの体に触れる。

仰向けに倒させると、気絶したきょうだいは力無くそれに従った。

その顔は、血塗れだった。

その体に、父様の指が触れていく。

傷を癒す気なのだ。

ぼんやりと、その光景を私は見ていた。

水の力で、その体の細胞分裂を早め、傷を治す。

いつも、父様がやっていることだ。

けれど、それではどうにならない。

私は、自分の胸に広がる赤いしみと、膝の上に落ちたままのひしやげたそれを見下ろした。

無い物は、治らない。

「……と……父様……！」

呼ぶと、父様は私の方を見た。その目はとても冷たくて、怒っているのが分かった。

その眼前に、血で汚れて痛みを訴える指を使って拾い上げたそれを差し出す。

「こ、これ、ヨウスイの……つ、つなげて、あげて……！」

「無理だ」

低い声はすぐさま切り返される。

「それは、もう、元には戻らない」

息が詰まった。

父様は、集中する為にその目をヨウスイへと戻す。

「……もう片方も、中はずたずたか。……無理、だな……」

小さく漏らしたのだろうその言葉が、とても大きく聞こえた。

私の手から、元に戻せないヨウスイの片目が落ちる。

それは私の膝を伝い、汚れた草の間に覗く地を転がってやがて止まり、意志無き視線で空を仰いだ。

それを見ながら、ゆっくりと、手を自分の顔へと伸ばす。

ひしゃげた眼球。スタスタの目玉。

それは、もう元には戻せない。

なら、無傷の物ならどうだろうか。

血塗れの指で、左の瞼をなぞった。

ここにある、これ、なら。

「……止める」

処置を終えたらしい父様が、そう言って私の腕を掴んだ。

顔から引き離されて、瞼から与えていた圧迫感があっさりと消える。

「そんな事をするな」

全てを見通したような声が、私に言う。

「でも……でも、父様」

力の強い腕に手を捕らえられたまま、私は父様を仰いだ。

「この目を、ヨウスイにつないではくれないでしょうか……？」

厳しい顔がゆっくりと左右に振られて、私に答えを返す。

「駄目だ。……他人の体を、その者に与える事など出来ない。その目は、つながる事は無い」

絶望を与える言葉が、その口から落とされた。

絶句する私の両の手を、父様がそつと握る。

すると、その手にあつた傷が暖かくなった。

癒されているのだ。

見詰めれば、癒しを受けている私の手は少し発光していた。

「……父様」

少し黙ってから、口を開く。

「何だ」

「……怒らない、のですか」

声も、その目も、見ただけで分かるほどに凍てついているのに、この手を癒しながら、どうしてその唇は責めないのだろうか。私の問いに、父様はため息と共に答えた。

「……それが、何になると言っただ」

まるで、その言葉は刃のように耳を撫でる。

「怒り、お前を責めて、それで何か変わるのか？」

父様は言い放ち、私の耳から冷えた言葉を遠ざけるように、また黙った。

私は、もう何も言えなかった。

突き放されたのだと、感じた。

どうしてだろう。

私は、両手を癒される格好のまま、目を動かした。

視界に、仰向けに倒されたヨウスイが映る。

二度と光を感じられないきょうだいを見る。

何て事を、してしまったのだろう。

図々しい程に、過剰な自信を持って、取り返しのつかない事をしてしまった。

どうしてだろう。

目の前がぼやりと霞む。

口がわななきそうになるのを感じて、必死になって歯を食いしばった。

馬鹿なことをしでかしたのは私なのに、この場で泣くなんてことが許されるはずもない。

そう思っのに、どうにも止まらない雫がぼろりと私の目から零れ、自分の膝へと落ちていく。

「……泣くんじゃない」

父様が言っで、私の手を放した。
その大きな手はそのまま私の顔に伸びて、指が頬を拭ってくれた。

「泣いても、何も、元には戻らない。泣くな」

とても冷たいその声は刃物のように凍てついているのに、父様は決して怒らない。責めない。

「……泣くんじゃ、ない」

叱ってはくれない。

宛がわれた刃はその存在を示すくせに、決して切り裂いてはくれない。

どうして。

この手の傷は消えたのに、どうして、あの目は元に戻らないのだろう。

+++

どうか

誰か

誰でも、良いから

何もかもを、奪ってくれて構わないから
どうか、罰を

どうか

償いを、させて

n
e
x
t

贖罪の瞳

この身が生きているなんて

こんな愚かな私が、生き続けるなんて

これは一体

何の冗談だというのか

+++

「おめでとunggざいます、スイキ様！」

ある日、目が覚めた瞬間に、私を起こしに來た使い女が突然祝いの言葉を述べた。

そうして、目を瞬かせている私の前から、軽やかな足取りで部屋を出ていく。

一体なんだと言っんだ？

戸惑いながらそれを見送っていた私は、使い女の足音が聞えなくなつてから、まさか、と思いついて寢台を降り、部屋に置かれてい

る姿見の前に向かった。

私の姿を反射す鏡の前に佇み、じっと見詰める。
そこには、何も出来なかった無力な子供が立っていた。

「……！」

そして、その両の耳の色が赤かった。

それがどういう事なのかを、瞬時に理解する。

私は、水の精霊だ。

純粹な水の精霊というのは精霊の中でも特異な存在で、ある一定の時期までは両性体だ。

数日間耳を赤く染め始めると性分化が始まり、そして性別が決まった時、初めて一人前と言われている。

私の体は、的確に時を刻んでいるのだ。

耳に触れて、更にじつくりと、鏡の中に佇む子供を見詰めた。

「……どうした、スイキ……」

小さな声で、まるでそこに誰か居るように、そつと呟く。

姿見に映された子供が音無く口を動かして、その瞳が私を反射している。

「全然、嬉しそうじゃないな」

笑いを込めた声は本当に小さくて、骨を伝って私に届いただけだった。

昔、私は早く大人になりたかったのだから、本来なら大喜びをしているだろうに。

それと真逆の心を込めた瞳のまま、私はただ一人、鏡の前に立ち尽くしていた。

+++

私の部屋から出て行った使い女は、そのまま館中にそれを伝えて回ったらしい。

私が着替え終えて室外へ出ると、そこを歩いていた使い女が、満面の笑みで祝いの言葉を述べた。

「おめでとございます、スイキ様！」

「……ああ」

ありがとうとはどうしても言えずに、ただ、短く声を漏らして歩き出す。

使い女は、私の背を見送って、そしてパタパタと駆けていった。それを少しだけ見送ってから、そのままヨウスイの部屋へ向かう。私は毎日ヨウスイの元へ通っていた。

もはや日課となっている道のりを、ただぼんやりと歩く。

時折すれ違う使い女達が、やはり祝いの言葉を私へ投げて寄越した。

それに先ほどのように小さく返事を返してから、ようやく辿り着いた部屋の扉を、そっと押し開く。

「誰？ 兄様？」

部屋に入れば、扉の軋みに気付いたのか、そんな声が部屋の主か

ら掛かった。

「ヨウスイ」

名を呼んで近付くと、幼いきょうだいは嬉しそうに微笑んだ。
その、可愛らしいだろう顔を、瞳を覆った痛々しい包帯が阻害する。

足を進めて、クッションの群れの中で座り込むヨウスイのそばへ行く。

そして隣へ座り込むと、小さな手が私の体に触れた。

「兄様」

私を兄と呼ぶ、ヨウスイは微笑んだままだ。

幼い手がそと私の体を伝って、私の首から頤に触れ、そのまま少し冷たい指先が私の唇へ触れる。

私も手を伸ばし、その瞳を覆いつくした包帯越しに、その顔に触れた。

「……痛むか？」

「ううん。もう、全然」

私の問いへ、すぐさま否定の声が上がる。

私は、口元へ触れてくるヨウスイに伝わるように、懸命に微笑を浮かべた。

「……良かった」

何が良いかったものか。

私は、偽りの笑みを浮かべたまま、ヨウスイの瞳を撫でる。

私が喚び出した水龍によって奪われた妹の瞳は、決して戻らない。私が潰したヨウスイの双眸は、もう光を見ることが出来ない。

それを思うだけで悲しく、できることならこの瞳を代わりに差し出したい程だ。

けれど、それはできないことなのだと、父様が言った。

他者の一部を与えることは出来ない。

失われた物は戻せない。

ああ、でも、ならばどうしたら良いのか。

償うことすら、許されないというのか。

「……兄様？」

そつと、尋ねる声がする。

目を向ければ、ヨウスイが少しだけ不思議そうな顔をしていた。

私が黙り込んでいたからだろう。

私は、何でもないと微笑を深くする。

「そう？」

少しだけ心配そうにして、けれど他の事を思い出したのか、ヨウスイは笑みをその顔に広げた。

そして言う。

「兄様、おめでとう！」

寄越された祝福に、体が少しばかり強張った。

それがなんに対する祝福なのかは、尋ねなくても分かる。

「きつと兄様なら、素敵な男の人になるわ」

楽しみねと微笑む、無邪気な声が、耳をくすぐった。
そうだったら良いが、と通常通りに返す自分の声が、ひどく遠い。
そんな、酷い事を、言うな。

頭の中で誰かがそう叫んでいるのを、どうにか無視した。

口を閉ざすことも出来ずに、滑稽な笑みを浮かべていた私の口元に触れて、ヨウスイも笑う。

まるで己のこのように、嬉しそうだ。

その目を潰したのは私なのに、どうして私を祝福できるのだろう。

「スイキ様」

部屋の扉が開いて、使い女が入ってきた。

そして、父様と母様が呼んでいるのだと、私に告げた。

+++

父様と母様は、私へ祝いの言葉を掛けて、宴を開きたいと言った。
性別化が終わってからが良いとそれを辞退して、私は二人の生活する部屋から出る。

足はゆっくりと廊下を辿って、そのまま己の部屋へと行き着いた。
扉を開いて、閉ざして、少し前まで寝転んでいた寝台の上へと飛び込む。

シーツの海は柔らかく私を受け止めて、僅かに埃が立った。
ゆっくりと、目を閉じる。

何故だか、とても、眠い。

体の力を抜いたら、すぐにも睡魔に攫われて行きそうなほどに、眠い。

このまま眠ってしまおうか、と、暗闇の視界の中を考える。
今日は父様の機嫌も最高潮だったから、少しくらいうたた寝しても怒られはしないだろう。

何か用事があつて誰かがこの部屋へ入ってくるまで、眠ってしまおう。

そう決めて、ゆっくりと体から力を抜いた。

予想通り、すぐさま襲つて来た睡魔は、慌てたように私の意識を連れ去っていく。

まるで現実から逃げ出したいようだと言嘲して、私は、僅かに引き止めていた意識を手放した。

+++

目が覚めた時、部屋は薄暗かった。

すでに夜だ。

息を吐いて寝台を降り、そつと部屋を出る。

静かな廊下はいつもと同じで、けれど廊下にある窓の硝子に映りこんだ己の姿が、いつもと同じではないのだと私へ告げた。

色が変わった両の耳。

ヨウスイをあんな目に遭わせたのに、ヨウスイの目は二度と光を得られないのに、私の体は何一つ失うことなく、ただ時を刻む。

何か叫びたい衝動に駆られて、けれどそんな真似をしたらきつと皆を驚かせるから、私は走り出した。

廊下を駆け抜けて、両開きの扉を押し開いて館から出る。

その半分を巨大な湖の上に、残り半分を岸边の花畑へと乗り上げた格好の住処へ背中を向けて、私の足は森へと向いた。

ただがむしゃらに脚を交互へ動かして、木々が入り組む森の中を行く。

木々は私を阻むように手を繋いでいたけれど、その下を潜って更に突き進む。

やがて、息が苦しくなるほどに進んだ時、不意に目の前が開けた。驚いて、立ち止まる。

そこには、小さな泉があった。

木々が円形に作り上げたその水面には、空からの月光が煌いている。

そして、その中央辺りに、人がひとり浮いていた。

「……！」

大きさから見て、私と同年代くらいの子供だろうか。

一房ずつ濃さの違う緑の髪は長く、水に浸って広がっている。

体からは、力も抜けているようだ。

まさか、溺れているのか。

「……………おい！」

声を上げながら、泉を満たす水へ頼み込んで、その子供の体を弾き上げた。

うわ、などと声を上げながら、子供は泉の岸へ尻餅を付く。

自分に起きた状況を理解できていないのだろう、子供はきよろきよと視線を彷徨わせて、そして私を見つけた。

正面から見たその顔立ちは少年のそれだった。

褐色色の肌をしていて、同じ色をしたその耳は真横に長く伸びている。

どうやら意識はすっかりとしているらしい彼の、エメラルド色の瞳を睨みつけた。

「こんな所で溺れたら、誰も助けになんか来れないだろう！」

言いながら、掌を彼へと向けて、小さな声で水たちに願いを呟いた。

水は私の願いに耳を傾けて、少年の体から剥がれ落ち、急速にその体が乾いていく。

「ああ……ありがとう」

言って、彼は立ち上がった。

手で、先ほど尻餅を付いて汚れてしまったのだろう箇所を叩いている。

「でも、俺、自分で入ったから。溺れてないからね」

誤解しないでよと少し高い声言って、その言葉に眉を寄せる。落ちて溺れたのだないとすれば、泳いでいたか、入水自殺か。穏やかな方だろうと見当を付けて、ため息を一つ。

「……泳ぐなら、昼間にしろ」

「いや、泳いでた訳でも無いんだ」

「じゃあ何だ」

やっぱり入水自殺か。

「え？ ええつと……」

私の視線に込められたものに気付いてか、彼は少し目を彷徨わせて眉を寄せる。

少しだけ言い訳を考えるように間を置いて、そして彼は口を開いた。

「やっぱ、泳いでた」

先程否定した筈の言葉を肯定して、誤魔化す様に少年は笑う。
何なのだろう、こいつは。

少し考えて、けれど別に本当の理由を言及する必要性など無いから、そうか、と呟いた。

うん、そう、と頷いて、彼は泉へ目を向ける。

その瞳には、僅かに寂しげな、切なそうな色が浮かんでいた。
けれど、それからこちらを向いた視線には、その感情の欠片も滲んでいない。

「あ、なあ、あんた、誰？」

問われて、軽く眉を上げる。

「……私を、知らないのか？」

私は、>氷王くの子供だ。

よく知られている方の部類に入っているだろうと思っていたから戸惑えば、うん、とあっさり彼は頷いた。

「そんな綺麗な顔、見たこと無い」

そんな風に言われて、一瞬む、とする。
私は、『息子』として育てられてきた。
外見を賛美されても、嬉しさは皆無だ。
私の反応には気付かずに、彼は私へと近付いた。

「俺、モクカって言うんだ。あんたは？」

先に名乗られて、仕方なく答える。

「……私は、スイキだ」

私が名前を答えても、彼は何も驚きはしない。
やはり、彼はまったく私を知らないらしい。
そして、微笑んだままの彼は、そつと私へ手を差し出した。

「……何だ？」

「家、何処？ 送るよ」

「何……？」

「一人歩きは危険だよ。綺麗だしさ」

そんなに変態なんて出ないけどさ、などとのたまう彼を見て、眉間に皺が寄ったのが分かった。

もしかして、私をただのか弱い子供だとも思い込んでいるのか。
ふざけた話だ。だが、先程から『綺麗』などと形容されているし、
そうなのかも知れない。

不愉快だ。

思いながら、そつと、差し出されたままの彼の手へと手を伸ばす。

そして、その袖を掴んだ。

父様から習った通りに、そこを支点にして足払いを掛け、軽く引いて振り抜き、私と同等程度の大きさの少年の体を転ばせる。

「あだ！」

地面へと背中をしたたか打ち付けたらしく、情けない潰れた声が出た。

それを見下ろして吐き捨てる。

「結構だ。自分の身くらい、自分で守れる。こんな風に」

私の言葉を聴いていた彼は目を丸くして、それから嬉しそうに笑って跳ね起きた。

「すっげ、スイキって強いんだ！」

「……あ、ああ。まあ、な」

突然喜ばれて訳が分からずに、けれどとりあえず頷いた。

そして、彼は私の手から自分の手と袖を取り戻し、じつとこちらを見て来る。

「俺と、今度組み手してくれない？」

突然、何を言い出すのだろうか。

目を瞬かせて、何かを間違えていないかと確認する。

「……私が？」

「そう！」

私の問いかけに、けれどモクカと名乗った子供はしっかり頷いた。変な奴だな、と私は目の前の相手を見つめる。

普通、突然転ばされたら怒るのではないだろうか。

「……いいぞ」

少しだけ考えて、それから小さく頷く。

自分の口元に、僅かな微笑が浮かんだのが分かった。

「明後日、で良いか？」

「明後日？ うん！」

急だと驚くかと思ったが、少年はあっさりと頷いた。

そして、約束だねとその手が伸びてくる。

小さな掌に手を掴まれそうになって、思わず避けた。

素肌に触れることが叶わなかった彼の指は、私の袖を捕まえて上下に振る。

握手みたいなものだろう。

されるがままになりながら、私は戸惑って己の手を見た。

触れられる、と思った時に、思わず避けてしまった。

何故だろうか。

考えてもよく分からず、すぐにその疑問を放棄する。

空には高く、月が昇っている。

何も言わずに出て来てしまったのだから、そろそろ、帰った方が
良いだろう。

「じゃあ、帰るから」

告げてやんわりと腕を振ると、彼はあっさりと私の手を開放した。

「あ、送ってく」

「……もう一回、投げ飛ばされたいか」

「いやいや、家見ただけだから。行く行く」

手を掴んでやろうかと思って手を伸ばすと、するりと避けられる。私の顔を見返してくる彼はとても笑っている。

嘆息して、肩を竦めた。

「……勝手にしろ」

言い置いて、先に歩き出す。

後ろを付いてくる気配がしたが、振り向かない。帰り道は、進めば進むだけ道が拓かれていった。

恐らく、彼がいるからだろう。

私の後ろを歩く彼は、十中八九、樹の精霊だ。

彼の為に、木々が道を拓いていく。

葉の合間から落ちてくる月光が足元を照らして、静かに、私達は歩いていた。

ふと、肩越しに後ろを見やる。

そこにあつた光景に、思わず呆れた声を漏らした。

後ろから歩いていた彼が、空を仰ぎながら歩行している。

何処の子供だ。

「……おい、あー……モク力」

名乗られた名前を思い出しながら呼ぶと、驚いたように視線が此方を向く。

転ぶぞ、と告げると、あははごめん、と彼は笑った。
それから、その口が、そういえば、と動く。

「ねえスイキ」

「……なんだ？」

「スイキって、男？ 女？」

至極あっさりした問いだった。

多分、彼に他意はないのだろう。

私の歩みが、止まる。

男になるか、女になるか。

これからどうなるかはまだ分からない。

もうじき、だろうけれど。

今は。

「……どちらでも無い」

足を再度動かしながら、ゆっくりと、どうにか押し出した声は酷くあっさりと響いて、そっか、とモクカが軽く返した。

そして、更に残酷な声言う。

「あれだね、スイキは綺麗だからどっちでも特だね」

ぼんやりと独り言のように呟く彼から、そっと目を逸らす。

「……どうかな」

男になるか、女になるか。

私の体は着実に時を刻む。

もつじきどちらになるかも決まる。

ただ分かるのは、私からは何も奪われてはいない、ということ。

私の眩きが聞こえたのか聞こえていないのかは分からないが、モク力はそれ以上何も言わず、歩き続ける私の後を付いてきた。

やがて森を抜けて、見慣れた屋敷が視界に入る。

「ここだ」

立ち止まって指差すと、追いついて来た彼が、驚いたように目を丸くする。

驚いたような戸惑ったようなその顔に、ここが氷王くヒョウガキの家だとは知っているのか、と把握した。

「え？　ここ？　だって、ここは氷王く様の家じゃない？」

「そうだ」

「で、ここがスイキの家？」

「そうだ」

「……えっと」

つまり、えっと、と呟いて、少し考え、それから大真面目に、彼は私を見た。

「スイキって、ここの使い女とかの、子供とか？」

あまりにも真面目に言うから、思わず噴出してしまった。

+++

「遅かったな、スイキ」

モクカと名乗った少年と別れてから何も言わずに出た館へ戻ると、開いた扉の中へ足を踏み入れる前に、私へとそんな声が落ちた。ゆつくりと、顔を上げる。

「……父様」

館の主が、そこに佇んでいた。
使い女達は、もう帰ったのだろうか。

いつもなら出迎える筈もない人が佇んでいることに目を瞬かせながら、そんなことをぼんやり考える。

私の視線の先で、ふと何かに気付いたように、父様が目を見開いた。

「スイキ？ お前……！」

「はい？」

驚愕に満ちた声に、首を傾げる。
私の戸惑いには気を払わずに、父様の大きな手が私の顔へと近付

いた。

その掌が己の頬へと触れる寸前に、背中を走り抜けた悪寒に弾かれて顔を背ける。

「……スイキ……？」

「あ……」

どうしたんだ、と、驚いたような戸惑ったような声を出す父様に、けれど私は答え切れず、ただ二歩ばかり後退した。

父様は戸惑っているけれど、私のほうがその感情は大きいだろう。どうして、顔を背けてしまったのだろうか。

あの大きな掌に頭を撫でられるのがとても好きだった筈なのに、その温もりが触れると思ったその瞬間に、湧き上がったそれは、記憶にあるその瞬間とはまったくの正反対だった。

嫌だった。

その温度を、感触を、感じることに嫌だったのだ。

「……な、んで……？」

呟く己の声は小さく掠れて、ひゅう、と吐いた息は惨めたらしき音を奏でた。

父様は眉を寄せて、更にその手を近付けようとする。

けれど、その手を凝視しながら体を強張らせ、どうにか逃げないようにと足へ力を入れる私に気付いて、動きを止めた。

「……来い、スイキ」

体勢を戻してから、父様が言い放つ。

見上げた先で父様が私へ背中を向けて、肩越しに私を見た。

「中へ入って、私の部屋へおいで」

もっと幼かった頃に言われたような、優しい声が振ってくる。

私は頷き、その背中を追いかけるようにして館へ入ってから扉を閉ざし、歩き出した父様の影を踏むようにして、その後ろに続いた。父様が書斎へ入り、開かれたままの扉から私も入室する。

扉の傍に佇む父様の暖かな温度に身を震わせながら、それでも隣りに立つ私に父様は嘆息した。

そして手を離して扉を閉ざし、父様は書斎にある大きな椅子へ座る。

「スイキ。見てみなさい」

そう言って、椅子に掛けたまま、父様はその手で部屋の一角を示した。

目をやれば、そこには姿見が立てかけられていた。

戸惑いながらも、言われるままに姿見の前に立つ。

そこには、幼い子供が映っていた。

今朝、見たのと同じ顔がそこにいた。

ただ。

「……え？」

その耳の色は、赤くない。

光の加減だろうか、耳を摘んで少し傾ける。

変化は無い。

元の色だった。

元の色に、戻っていた。

驚いて、私は父様を見る。

父様は眉を寄せて、そしてゆっくりと頷いた。

私は、己の体を見る。

一昨日とも、昨日とも、今朝とも、何も変わった様子は無い。
無い、けれど。

「……私、は……性分化、したのですか？」

鏡を見たまま、そっと尋ねる。

この耳が色を失った以上、そうであることに違いなかった。

私は、大人になってしまったのだ。

何の障害も無く、何の滞りも無く。

ヨウスイは未だ光無い世界で行き続けているというのに。

絶望的な気分になりながら父様を見つめる私へ、けれど、父様は
首を振って返す。

「……お前は、まだ、性分化していない」

「……え？」

父様の言葉に、目を見開く。

父様の耳が、不機嫌に少し揺らいた。

「性分化すれば、気配が変わる。姿形で分からなくても、女性体が
男性体が、伝わるそれですぐに分かる」

けれど、と言葉を置いて、父様の瞳が微かに揺れた。

「……けれど、スイキ。お前には変化が無い」

それは、つまり。

私は、目を大きく見開いた。

体ごと父様へ振り返り、その椅子へ近付く。

空気を伝わる温度に吐き気がする直前で足を止めて、じっとその顔を見る。

何かを悔いるように眉を寄せる父様を、じっと、見る。

「……じゃあ、父様。父様、私は……」

水の精霊が、性分化するのは生涯の間でただの一回。

そして、私はそれを性分化することなく終えた。

だから、つまり。

「……ああ。そうだ」

私の声には期待が入り混じってしまったのだろうか、苦しげに声を漏らして、父様はその目を伏せた。

「お前は、もう、性分化出来ない」

大人に、ならない。

父様が目を閉じてくれて良かった、と、心からそう思った。

何故なら、私の唇はきつと、弧を描いたからだ。

上がってしまった口角を無理やり引き下ろして、私はそつと己の体に触れる。

二度と、『一人前』となれなくなった出来損ないの体に触れる。
何という事だろう。

「……すまない、スイキ。何か手立てはあるはずだ。必ず、それを見つけてやる」

言い放ち、父様の手が拳を握る。

「だから、それまで待っている」

必ず見つけてやるからと繰り返して、父様が瞳を開き、私を見た。その深海色の瞳には決意が漲っていて、激しく強い言葉に私はそっと息を吐いた。

そして、ゆっくりと首を振る。

「いいえ、父様」

どうかそんなことはしないでと、声には出さずに懇願した。手を伸ばして、その手へと指先を触れさせる。

それだけで、胃の中の物全てを吐き出したくなるような吐き気が湧き上がった。

ゆっくりと、指先を父様から離す。

ああ、これもだ。

生理的に浮かんだ涙で睫毛を濡らしたまま、私は父様を見つめた。

「これは」

これは。

「罰です」

罰だ。

私の言葉に、父様が目を見開く。

その深い青の瞳に、私の姿が良く映り込んだ。

「……お前が罰を受けても、あの子の目は元には戻らない」

少しの沈黙の後、父様は声を絞り出した。
その言葉にはゆっくりと頷いて、それから首を振った。

「私は、罰されたんです」

罪に見合うのかは分らない。
足りないような気もする。

けれど、確かに、私は罰を受けたのだ。

「罰を、受けた」

私の呟きに、父様は痛みを感じたかのようにその瞳を細めた。
そして、私へと手を伸ばし掛けて、下ろす。

触れ合うことがそのまま私への苦痛となることを、もう父様は知
っている。

私は、それを、じっと、見ていた。

本当は、歓喜の声を上げて両手を叩き駆け回りたいほどに嬉しか
った。

けれど、そんなことをすれば、恐らく父様は私を叱り、そして己
を責めるのだろう。

だから、それから声を漏らすことなくゆっくりと俯き、私は目を
閉じた。

+++

償いたくて望む罰は

もう、罰とは呼べないのかも知れない

けれど

私へと、罰は与えられた

私の願いが

叶えられた

n
e
x
t

ぼくは、あるきだした。

罰は、貰った

けれど、それは決して償いにはならないのだと、気が付いた

+++

陽射しが、とても暖かに大きな窓から差し込んでいた。

昼間の陽光に目を細めて、私は窓の外を見やる。

雨なんて降る様子もない青空が広がって、風が吹いたのか木々がざわざわとざわめいた。

それを見て、その下でいつも楽しそうに笑っていた少女を思い出して、唇を噛む。

こんな些細な光景ですら、もうあの子は見られない。

私が光を奪った私のきょうだいは、今も静養中だ。

一人で出歩くことすら危ない。

私がああの可愛らしいきょうだいから、光を奪って暫くが経った。

私は、その罪に対するようなわずかな罰を得た。

大人になる過程で得るはずの性分化が出来ず、他者との接触が困難になった。

けれど。

けれど、ヨウスイの両目は元には戻らない。
それは、初めから分かっていったことだった。
私が罰を受けても、あの子の瞳は戻らない。

ヨウスイは、これから先、この青空を見る事なんて出来ないのだ。
ゆっくりと、息を吐く。それは溜息にも似ていた。

どうすれば、良いのだろう。

どうすれば、私はただ一人のきょうだいに償うことが出来るのだろうか。

考えても、答えは出ないままだ。

私は、知らず俯いていた顔を、ゆっくりと上げた。

ヨウスイは今、屋敷の奥まったところに部屋を移し、母様と一緒にいるのだと父様は言っていた。

ならば、もうそろそろ起きている時間だろう。

会いに行こうか、と思索して、それを行動に移すべく動くことにする。

座っていた椅子から立ち、椅子を戻して部屋を出た。

ドアの前から左右へまっすぐ伸びる廊下を、奥の方へと歩き出す。

この屋敷は広いけれど、我が家だから間違えるはずもない。

だから、私の足が廊下の途中で止まったのは、決して迷ったわけではなく、ただ、声が聞こえたからだった。

「お願いです、ヒョウガキ様」

それは、多分私と同世代くらいの少年の声だった。そして、その声が呼んだのは父様の名前だった。

父様に、子供の客人というのは珍しい。

私は目を丸くして、声のした方を見やる。

父様が客人を通す応接室がそこにはあって、更に、閉じ損ねたのかドアが少しだけ開いていた。

足音を消して、そちらへそっと近付く。

そのまま、私はそこから中を覗いた。

そこには、ソファに座る父様と、そして客人らしい少年がいた。父様の真向かいに座っている。

背中がこちらを向いていて、顔は分からない。ただ、大地色の長髪を、まとめることなく肩から流しているのが窺えた。

少年は、先程の言葉の続きだろう言葉を吐く。

「教えてください、ヒョウガキ様。どうして、『忌み子』なんですか」

問う声は、まるで詰問するように鋭く尖っていた。

「何でチノが、……………チノさんが、そう呼ばれなきゃいけないんですか」

『忌み子』。

会ったことは無いが、そう呼ばれる存在を私は知っていた。

>地主くウテン様が引き取ったという、不思議な子供だ。

額に精霊の証である石を持たず、左の頬に妙な痣を受けた者。呪われた子。

何の呪いで誰がかけたかも分からないのに、その子供は恐らく、その名前を享受してきたのだろう。

私が見ている前で、父が軽く肩を竦める。

「さあな。そう呼んでいたのは、あれの周りに居た連中だ。別に、名付けてはいない」

「どうして、そう、呼んだんですか」

父様のはぐらかすような言葉に、彼は食い下がった。

父様が、彼を見やる。

「……知って、どうする」

声がひやりと冷たいことに、私は気が付いた。

温度の無いその声は父様の属性にとても相応しく、だからこそ不思議だった。

父様は、むやみにあんな声を出したりはしない。

まるできりつけるようなその冷たさにも怯むことなく、少年がはつきりと答える。

「知れば、きっと、不安にさせずに済むと思うんです」

「誰を」

「チノさん、を」

ただそのために、とそう告げる彼の声がまっすぐに暖かなのが、扉越しの私にも分かった。

私は、その『忌み子』に会ったことが無い。

ただ、そういう存在が居るらしいと認識するくらいだ。

けれど多分、父様の前に立つ彼は、そこから進んでいるのだろう、と思った。

出会い、知り合い、そして更に理解しようとしているのだ。

父様の表情が、ふ、と和らぐ。

私には分かった。あれは笑みだ。

「……あの子には、何もない」

囁きは深く、静かで、穏やかだった。

「性別も、魔法石も、その属性もだ。あの子供には、『自分』を分類するための手段が何一つ無い」

父様は、そう述べてから一息吐き、そして目の前にいる少年を見たまま続けた。

「お前は知らんだろうが、あの子供には特別な力がある。……体質、と言った方が良くかも知れないな。本人の意志ではどうにも出来ない能力だ」

「能力……？」

「そう。傷付いた自分の身体を癒すために、周囲から力を吸い取る」
父様の身体が傾いて、柔らかな応接室のソファにその背中が預けられた。ゆつたりと、その視線が天井を見上げる。

「あの子供が望んだ訳じゃない。ただ、あの子は全てを統べるだけだ」

「……どういう、ことですか」

少し身を乗り出して、少年が訊いた。
父様も視線を戻し、彼を見る。

「あの子には属性が無い。力をしきる物が無い。故に……言わば、全てを扱えることになる」

しっかりと答える、その声に曖昧さは無かった。

「たとえば私よりも水を操り、セイクウよりも風を手繰り、カルライよりも炎を使い、ウテンよりも大地を動かすことが出来る、ただ一人だ」

自分を含めたどの>王<よりも『忌み子』は力に恵まれているのだと、父様は言葉を繋げた。

「強大な力は、怖ろしい。そう思うんじゃないか？」

そこまで彼へ告げてから、つい、とその青い双眸がこちらを見た。しっかりと見つめられて、とたんに自分の行動を羞じてしまい顔に血が上る。こんなのはただの盗み聞きだ。

慌てて足を一步引いたところで、水かきのある大きな手がひらひらと私を手招いた。

「入ってきなさい」

そう呼ばれては、逃げ出すことも出来ない。

私は、仕方なく入室した。

客人である少年と部屋の主へ一礼し、私を招き入れた父様の傍まで歩く。

そしてその横に立った私を示して、父様は目の前に座る土色の髪の少年に目を戻した。

突然現れた私に、客人は戸惑ったようにしている。

額の石からすると、炎の精霊だろうか。燃えさかる炎と同じ、真っ赤な瞳をしていた。

「紹介しよう。息子の、スイキだ」

はつきり、そしてあっさりと吐き出されたその言葉に、私は目を見開いた。

それから、父様を見下ろす。父様は、その視線を上げもしない。どうしてと尋ねかけて、でも口から声が出なかった。

父様は私を息子と呼んだ。

性分化しなかった未熟なこの身を、『息子』と、そう呼んだのだ。胸の奥が痛くなって、眉を寄せる。

それでも、挨拶のために改めて、同世代だろう客人へ頭を下げた。

「スイキ。こちらは、>炎王<の息子だ。カエン……だったな？」

父様がそう言うのと、目の前に座っていた少年は複雑そうに笑ってから頷き、私と同じように頭を下げた。

それから、その手をこちらへと差し出す。

「よろしく、スイキ」

呼び捨てられて、はつきりと『男』扱いされていることを認識した。

それは、嫡男として育てられてきたのだから喜ぶべきなのか。

それとも、罰を受けている身でありながらと己を羞じるべきなのか。

戸惑いながら、とりあえずはゆっくりとその手へ手を伸ばす。

近付いて伝わる体温に、背中がじつたりと汗を掻くのが分かった。気持ちが悪い。

けれどこれは体質で、そうだこれも私へ与えられた罰の一つだ。しっかりと握手を交わせたのは多分ほんの数秒で、あとは逃げるようにその手から逃れてしまった。

これは、もしかしたら心証を悪くしたかも知れない。

思いながら窺うと、カエンという名の彼は戸惑ったようにして目

を丸くしているだけだった。

その様子に、ほ、と息を吐いたところで、声が乱入してくる。

「スイキ、スイキ、スイキーっ!!」

それは、少し前に出来た、樹木属性を持つ友人の、私の名前を連呼する声だった。

+++

「スイキいた！ 今すぐ！ 今、出られないか!？」

「……本当に、どうしたんだ？」

慌てた様子で勝手に入ってきた客人に、不思議に思っ問いかける。

すると、ただひたすら慌てた様子で、モク力は説明を口にした。

「さっき、そこで！ ほら崖あるじゃん、あそこの下で！ 子供が落ちてたんだよ、酷い大怪我で！ だから早く行こう！」

上手くまとめられていないその台詞に、少し目を瞬かせてから、大きく見開く。

まとめると、『崖の下に大怪我した子供がいる』ということだ。数秒考えて、その恐るべき事態に眼を見開いた。

「……何だと!？」

「だから、子供だよ！ 髪が黒くて、そうだ顔に包帯も巻いてた！ 左半分くらい覆ってたし、他に悪いところあったのかも！ 動かさないくらい酷いし、早く、早く行かなけりゃやばいよ！」

思い出したのか青くなって、モクカが手を伸ばして半開きの扉を大きく開かせる。

私が触られるのが嫌いだと知ってから、モクカはその手をむやみに差し出したりしない。

私は後ろを振り向いた。

父様に指示を仰ごうと口を開きかけ、真っ青な顔をしてこちらへ駆けてくる父様の客人を見つける。

寄り添われては大変だと、驚きながら身を引いた。

「そ、その子、チノじゃなかったか!？」

モクカの手を捕まえて、彼は言った。声は不安に揺れていて、モクカの顔の顰め方からして、手には非常に力が入っているようだ。

チノ、というのは、聞いた覚えのある名前だ。

私は思案し、納得する。

つい先程聞いたじゃないか。

忌み子の名前だ。

戸惑いを浮かべたモクカが、わずかに瞳を揺らして問いに答える。

「分からない、見たこと無い子だったのは確かだけど……」

「黒い髪で、黒い目で！ ……そうだ、しゃべらなかっただろ?! 呻き声一つ出さなかっただろ!？」

「声？」

言われて、ええと、とモクカが考え込む。

それから頷いて、それを見た彼はモクカの手を放して目の前の襟首を掴んだ。

がくがくと揺さぶられて、モクカが間抜けに無明瞭な声を零す。

「何処だ！？ 何処にいたんだ！？」

とてつもなく必死な様子に眉を寄せてから、私はとりあえずその動きを止めようと思って手を伸ばした。

その子供の居場所を知っているのはモクカだけなのだ。そんなことをしている暇があったら、さっさと向かったほうがいいに違いない。

「わ！ ちょ、ちょっと待てって！」

けれどモクカが彼を突き飛ばしたので、彼の服に触れようとしていた手は引つ込めた。

モクカの目が、私を見る。

「早く行こう、スイキ！ あのまんまじゃ危ないって！」

「ああ、分かった。……父様！」

私は父様を見た。

青い瞳がこちらを見て、そうしてその口が言葉を零す。

「私はすぐに出ることが出来ない。スイキ、先にお前が行け」

その言葉は、冷たすぎるほどに淡々としていた。

けれど、それは事実だったから、わかりました、と頷いて応える。
父様は>氷王< 様だ。

怪我人を連れてきたならすぐに治療をしてくれただろうが、すぐさま館を飛び出すことはできない。

父様が館から離れるためには、父様の代わりを務められる水の精霊を何人か呼び寄せて、館に待機させなくてはならないのだ。

「もしも手におえないほどなら、すぐに引き返してきます」

私はまだまだ未熟だから、恐らく完治させることは難しいだろう。けれど私がある程度の処置をしておけば、その間に父様は準備をしてくれるに違いない。

私の言葉に>氷王<である父様は頷き、それから立ち上がった。

「おい、そのの」

冷たい氷のような色の目が、モク力を見ている。

「……俺ですか？」

視線を受けて、モク力が自分を指差した。

「そうだ。モク力、だったか。お前だ」

言いながら父様は歩き、カルライ様のご子息の背後に佇んで、モク力を見下ろす。

「お前が言う、その怪我をしている子供というのは恐らく忌み子だが。それでも、助けたいか？」

囁いて訊ねる声には、何の感情もこもっていない様だった。

私は、湖の底みたいにな静かなその目を眺めた。

何故、そんなことを聞くのだろう。

父様は、その子を助けたくはないのだろうか。

忌み子だから？

そこまで思考が動いてから、いいや、と内心で首を振った。

恐らく、そうじゃない。

これは、モク力を試しているのだ。

それが、何故かは分からないけれど。

「……忌み子？」

モク力が小さく呟く。

驚いたように目を見張ったモク力は、少しだけ考えて、けれどすぐに拗ねたような表情に変わった。

「だって……」

エメラルドの瞳には『必死』を宿して、まるで叫ぶようにモク力は言う。

「だって早く助けなきゃ死んじゃうだろ！」

そうか、と父様は頷いた。

その動きを見ている暇すら惜しいのか、早く連れて行け、と、カールライ様のご息が声を上げる。

それに弾かれたように、頷いたモク力が走り出した。

慌てて、私も茶髪の彼も走り出す。廊下から玄関、そして外へ。

何かを確認するように、ちらりとモク力がこちらを見やったので、

その目をじろりと睨みつける。
転んだらどうするつもりだ。
私の憤りを感じたのか、モク力は慌てて元通り前を向いた。

+++

辿り着いた森のすぐ傍で、私は、ぐったりと座り込んでいた。
足に力が入らない。
それが何故かは分かっている。
怪我して倒れていたあの子供の、特異体質の影響だ。
駆け付けて、自分では治せないほどに深い怪我なのを確認して、
とりあえずの応急処置を施した。

その際に、あの子供が私の身体からエネルギーを吸い取ったのだ。
そうされたのは僅かな時間だし、私にはその怪我を治せないから
出来る限りは与えるつもりで、けれどそれでも到底足りないほどに
あの子供の怪我は深かった。

痛いだろうに、申し訳なさそうに私を見上げていた右目を思い出して、頂垂れる。

近付いたのは私だし、あの体質は本人ではどうにも出来ないのだから、きっとあの子供はいつもあんな顔をするのだろう。

言葉を交わすこともなかったのに感じ取れるくらいに、穏やかな目をしていた。

私は溜息を吐く。

怪我すら完治させられず、あんな目をさせてしまった自分が情けなくて、涙が出そうだった。

何処にいたって、私は役に立たない。

「なあ、大丈夫か？」

ふと、私と同じようにここへと移動してきたモクカが、こちらへと近寄ってきて尋ねた。

心配されていることを感じ取り、私は頷く。

「……ああ」

それから、目を閉じて、手で顔を覆う。

「……力が、全然足りなかった……」

結局応急処置しか出来なかった子供を置いて、私達は今ここにいる。

動かして大丈夫なのかそれすら分からない状態で、あの子供を連れて行くことは出来なかった。

屋敷から一緒に来たカエンだけを残して、今から父様呼びに戻るのだ。

私の足が動かないのと、往復するなら風の精霊を呼んだ方が早いから、ということ、モクカは彼等と呼ぶ陣を書いていた。さっきは慌てすぎてそのことに気付かなかっただけらしい。

後は、呼び出された風の精霊を待つだけだ。

「……駄目だった……」

小さく呟くと、モクカの声が私の上から落ちた。

「仕方ないだろ？ 足りなかったんだから」

声は淡々としていて、思わず顔を上げる。

見上げた先で、モクカは突然動いた私に驚いた顔をしていた。
その口が、だつてさ、と言葉を続ける。

「俺達まだ子供じゃん？」

まるで自分を弁護するようなその言葉は、でも、卑屈な響きなど
なかった。

例えば雲を雲だというような、当然なことなのだと囁く響きを持
っていた。

「勉強し続けて人生もようやく下り坂つて感じの>氷王く様達と、
張り合える訳ないしさ」

ね、と微笑むモクカに、思わず呆れた視線を向けてしまう。

「下り坂つて……」

未だ>王くとしての力を誇る父様を、そう称するのは恐らく目の
前のこいつくらいだ。

私の視線を受け止めて、モクカが肩を竦める。

「でもさ、背伸びしたって仕方ないし」

モクカは言う。

「出来ないことを誤魔化したって、出来るようにはならないしな」

それは真実だ。

どう足掻いたって、出来なかったことがすぐさま出来るようにな
る筈がない。

私はきょうだいの目を元には戻せないし、あの大怪我をした子供の怪我すら治せはしない。

俯きそうになった私へと、だけどき、とモク力は笑いかける。

「これから勉強して出来るようになれば良いだろ？」

それだけの事なのだと、笑った彼は指を一つ立てた。

「俺もスイキも、まだまだこれからだって！」

明るい声が、そう言った。

私は、瞬いてモク力を見上げる。

私には知識がない。力が足りない。

ならば、それらをこれから身につけていけばよいのだと、彼は笑って言う。

モク力の主張は、すんと、私の胸へ落ちた。

そうだ。

そうだ、その通りだ。

罰を求めて、罰を得て、立ち止まるだけでは何も終わらない。始まりもしない。

償いたいのなら、私はまず立ち止まることを止めなくてはならないのだ。

それはとても簡単な答えで、けれど確実に私が欲していたものだった。

「……当たり前だ」

「あ、何それ。人がせつかくさあ」

「慰め方が下手だな。私ならもつと上手く出来る」

「うつわ、酷え」

私は、きつと、一目で分かるほどに意気消沈していたのだろう。
目の前の優しい友は、だから今みたいなことを言ったのだ。

心遣いがくすぐったくて、思わず叩いた憎まれ口に、むう、とモ
ク力が頬を膨らませている。

けれどそのエメラルド色の瞳が安堵を浮かべているのが分かって、
私は小さく笑った。

+++

館に戻り、父様に立立して貰った。

程なくして父様は戻ってきて、あの子供はウテン様の元へ届けた
のだと言った。

それから暫くモクカと過ごし、日が暮れた頃に彼を送り出して、
私は一人きりの部屋に居る。

外は、もう暗闇だ。

私は、自分の掌を見下ろした。

この手は、まだ、小さい。

けれど、これから育つことの出来る手だった。

私はまだ幼い。

つまり、学ぶための時間が多い、ということだ。

「……よし」

私は頷き、部屋を出る。

日が暮れてすぐに明かりの灯された廊下は長くて、そのまま辿ればすぐに、転ぶこともなく父様の私室へと辿り着くことが出来た。

扉を叩こうとして、ふわりと扉が動く。

きちんと閉ざされていなかったようだ。

そして、昼間と同じように、そこには誰かが訪れていて、その声が漏れ聞こえた。

昼間と全く同じ状況に、このままでは盗み聞きになってしまうと気がついて、とりあえず離れようと動き出した私の足を、中から聞こえた言葉が引き止める。

「チノちゃんの様子はどうだった？」

チノ、というのは、あの大怪我をしていた子供の名前だ。

私が応急処置しか出来なかった、あの子供の名前だ。

私は、思わず中を窺う。

父様の姿も、尋ねてきている客人の姿も見えなかった。

父様の声が、客人へ答える。

「殆ど完治している。怪我している癖に動いていたから、思わず叱ってしまったがな」

「うわ、ヒョウガに怒られたら泣いちゃうだろ？」

「そんなに柔じゃないだろう」

会話を聞いて、私は目を瞬かせた。

父様にここまで普通に話し掛ける人は、あまりいない。

更に言うなら、父様の名前を『ヒョウガ』と縮めて呼ぶのは、三人しかいないはずだ。

セイクウ様はモクカを送っていったはずだし、ウテン様は今館に怪我人が居るのだから外出するはずもないだろう。

なら、ここに居るのは>炎王<様じゃないだろうか。

「大体、お前はそんなことを聞きに来たんじゃないだろうか？ カルライ」

私がいっいついた名前と、父様が呼んだ名前は同じだった。

>炎王<カルライ様が、小さく笑い声を漏らす。

「いや、一応それも聞きに来たんだぜ？ 後は、あー……暇つぶし？」

「ふざけた男だな、相変わらず」

父様の声は冷え冷えとしている。

けれど、少し楽しそうだった。

父様がこんな声を出すのは、私達家族の前か、友人の前だけだ。

私は、そつと扉を押した。

音を立てないように、そつと閉めていく。

「スイキ」

それを、名前を呼ばれて阻まれた。

驚いて動きを止めてしまった私の前で、扉が開かれる。

扉を開いたのは赤い髪の>王<で、カルライ様だ。じつと見上げて、昼間来ていたカエンに似ているな、と何となく思う。親子なのだから当然と言えば当然だろうか。

部屋の奥にいた父様が、僅かに微笑みながら手招きをする。

一度カルライ様に頭を下げてから、私は父様の元へと歩いた。

「どうした？ 何か、用事か」

「え、あ、はい、父様。でも」

客人が来ているのだから、私を構うこともないだろう。

そう言った気持ちを込めて見上げると、今度は大きく表情を動かして微笑んだ父様が、そのままの笑顔をカルライ様へ向けた。

「というわけだから帰れ」

「父様！？」

「はいはい。またね、あー……スイキ、くん？」

いつもなら決して客人に使わないような退室命令に、けれど氣にした様子もなくカルライ様は従って、先程開いた扉から外へ出た。手を振ったその姿が、ぱたり、と扉を閉ざされて見えなくなる。

「あの、父様……」

「構わん。どうせただの時間潰しだ」

氣にすることは無い、と優しい声で言われて、それで？ と促された。

「お前の用事は何だ？ スイキ」

湖の底みたいな青い瞳が、私を見下ろす。
それを、私はまっすぐに見上げた。

父様は、大きい。

私よりも大きくて、私よりも物事を知っていて、私よりも強い。その父様が、ヨウスイの目は治せないのだと言っていた。

けれど、私の身体を性分化する術を、前例が無いそれを調べてやると言っていた。

見つけてやると言っていた。

同じように、きっと、ヨウスイの目を治す方法も探しているだろう。

ならば。

ならば、私も。

「父様」

深く息を吸い、そして私は父様へ言葉を紡いだ。

「私は、ヨウスイの目を、治したいです」

ただの手伝いで良いから、させてくださいと願う。

父様の目が、驚いたように丸く見開かれる。

それから数拍を置いて、わずかに微笑み、父様は頷いてくれた。

+++

罰ならば貰った

けれど、そう、それで償いには、なりはしない
だから、私は

その先へ進むために、歩き出した

e
n
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9955q/>

精霊の子供の話(スイキ)

2011年2月20日07時38分発行